

6) フジバカマ=藤袴・蘭

キク科の多年草で茎は直立し、大きなものは2mに達する。夏の終わり頃から秋にかけて、**散房花序**の淡い藤紫の小花を多数つける。中国を原産地とし日本にも分布する自然野草で、古く大陸から渡来したとする説もある。関東以西の本州、四国、九州の陽の当たる草原や川岸、土手などに普通に生える。最近では野草ブームの中、庭に植えることも多く、野生のものは少なくなってしまった。葉や茎の半乾燥状態のものには芳香があり、中国では「香草」の呼び名もある。和名の起りは花の色が藤に似ており、花卉の形が袴に似ているためとも、『藤花香含草』（フジバナカフクミグサ）が詰まったものともいわれている。別称としてはコメバナ、ウサギノサトウグサ、モチバナなどがある。中国では前述の香草のほかに、「香水蘭」とか「蘭草」とか、古くは「蘭草」ともいわれており、『詩経』には「蘭(カン)」として、また『易経』や『礼記』には「蘭」としてその名が見える。蘭は今ではラン科の植物を総称するものとなっているが、当時は「蘭草、大都(夕卜=概ねという意味)沢菊に似たり」と『楚辞』に詠われているように、キク科の草本を意味していた。いわゆる蘭は「蘭花」といい、藤袴は「蘭草」と呼んで区別していたのである。この芳香は孔子をして「王者の香り」といわしめたほどで、中国では浴湯に入れたり、身に付けたりしていた。また漢方でも開花期に茎葉を摘み、干したものを『蘭草』と呼び、浴湯料として用いると疲労回復によいといわれ、利尿の効果があるとされている。学名は『*Eupatorium fortunei*』で、属名は小アジアのポントス王の名「Eupator」に奉げたものである。

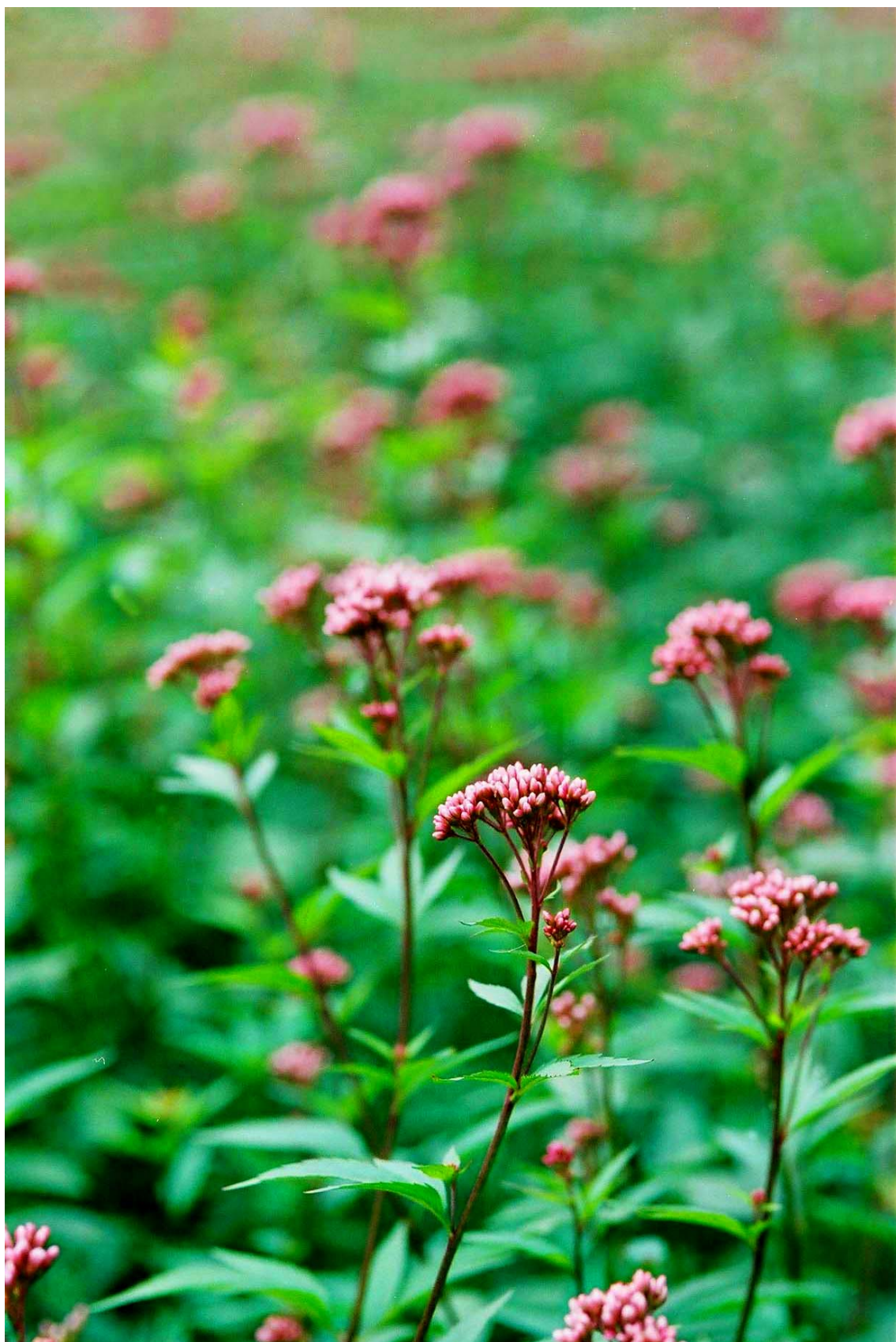
日本でもこの草は古くから知られており、『日本書紀』の「允恭(イギョウ)天皇紀」には、「蘭」(ラニと発音していたらしい)の文字が見える。これによると、後に皇后となる『忍坂大中姫命』(オシサカノオオナカヒメノミコト=[01-06-04](#) 桜の項参照)が庭で遊んでいると、馬に乗って通りかかった『鬪鷄国造』(ツゲノミヤツコ)が無礼にも「ブユを追い払うための鞭にしたいから」と言って、無理矢理に姫から蘭を貰っていった。このため後日『国造』は『稻置』(イナギ)に格下げになったと記されている。日本でもこの草の薬効が、知られていたのだろう。しかしながら『万葉集』にはフジバカマは1首しか見ることはできない。例の山上憶良の歌で、

萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花また藤袴 朝顔の花

というもので、これが『古今集』の時代になると、多くの歌が詠まれるようになる。

何人か来て脱ぎ掛けし藤袴 来る秋ごとに野辺をにほわす

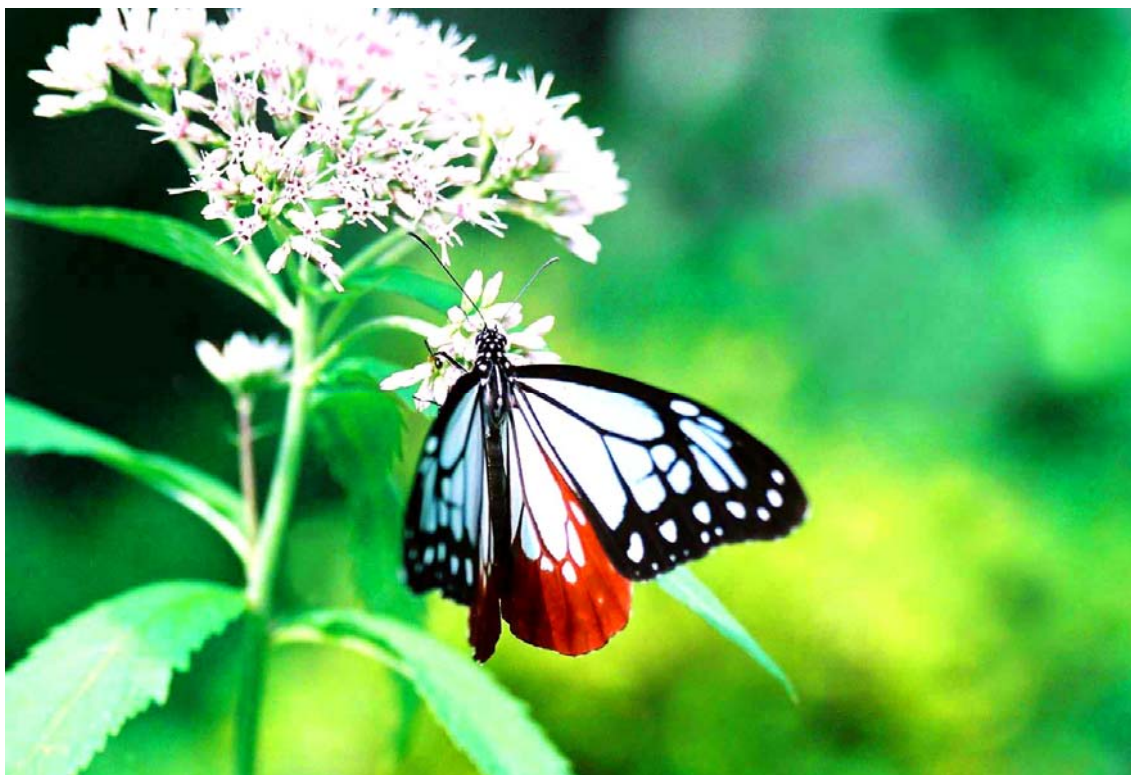
この藤原敏行の歌は藤袴を衣に見立てている。『源氏物語』の第三十帖には「藤袴」という巻があり、紫式部は薫香の表現手法として、「薫」や「匂宮」などの人名と同様、巻名にも芳香のある花を用いている。この巻で「藤袴」は、喪服によく用いられた「藤衣」を意味するものとなっており、敏行の歌と同様、「花」を「衣」に置き換えている。香る花を衣と重ねることによって、イメージの増幅を狙ったのだろう。



秋の七草の一つフジバカマは香りもよい(さいたま市岩槻区)。



珍しい白花のフジバカマに、キタテハがやってきた(さいたま市緑区)。



アサギマダラは旅をする蝶として知られ、気温の高いときは山で暮らし、温度が下がって来ると平地に下りて来る。フジバカマを吸蜜するアサギマダラ (埼玉県深谷市グリーンセンター)。



フジバカマは浴湯料に用いられれば疲労回復にもよいという (国分寺市万葉植物園)。 [目次に戻る](#)